

作家 三浦綾子さん

清水 勝

「何でも読もう会」七月の課題本は、三浦綾子『塩狩峠』だった。三浦綾子といえば、一九六四年朝日新聞の二千万円懸賞小説に『氷点』で入賞し、旭川市の雑貨店を営む四十二歳の無名の主婦であったことから、世間を驚かせた。

その後『ひつじが丘』『積み木の箱』『泥流地帯』『細川ガラシャ夫人』等々、七十七歳で亡くなるまで八十四の作品を書いた。

「愛と祈りの文芸」と云われており、愛については自己中心的な恋愛ではなく、相手を生かすことであり、許すことだと説く。

『塩狩峠』は、日本基督教団出版局が発行している月刊誌「信徒の友」に二年半に亘り連載された。

キリスト教を毛嫌いする主人公 永野信夫が伝道師の話を聞いたことから、別居していた母が信じているキリスト教信者になる。

主題は自己犠牲の尊さを読者に問い、訴えている。実際にあった明治時代の鉄道事故で殉職したクリスチャン長野正雄の行為を、主人公 永野信夫として十歳から描いている。子供時代の場面では、人間の平等や約束の重要性、友情に触れられている。

永野は、親友吉川の妹で肺結核とカリエスを患っているふじ子との結婚を考える。ふじ子の病状が良くなるまで待ち続け、待ちに待った結納の日に、乗客を守るべく身を投げ出して列車を止め殉職する。

ラストのふじ子の姿に涙しつつ、三浦綾子さんを知りたくて、自伝『道ありき』（青春篇・結婚編）を読んだ。

これは三浦綾子の個人史ではあるが、そこには自慢話や成功譚は一切なく、あくまでも自己を厳しく凝視している。

肺結核のために婚約を破棄し、その後十三年間の療養生活を強いられた中で、絶望の気持ちがありながらも、生きるということを常に意識していた様子が描かれる。

「雑貨店を営む主婦とあるが、その雑貨店は商品を買いに来るといっても、話を聴いて欲しい人たちが訪ねて来る場でもある。

- ・ 神のために自分は書く。
- ・ 神の愛を伝える目的と意思を貫きたい。
- ・ そんな作家であることが解った。

〈参考〉

- ・ 『三浦綾子の生涯と文芸』 水谷 昭夫 1986年 新愛出版
- ・ 『三浦綾子の心』 佐古純一郎 1989年 朝文社
- ・ 『三浦綾子論』 黒古 一夫 1994年 小学館
- ・ 『三浦綾子の創作秘話』 三浦 光世 2001年 主婦の友社
- ・ 『道ありき』（青春篇） 三浦 綾子 1980年 新潮文庫
- ・ 『この土の器をも』（『道ありき』第二部結婚編） 1980年 主婦の友社